

論文

アメリカにおける歴史認識と暴力的革命との繋がり

ジェイソン・モーガン（麗澤大学准教授）

2020年とアメリカにおける歴史認識の革命

2020年は、アメリカが大きく変わった一年だった。武漢ウイルスは当然、アメリカをはじめ世界の経済、政治体制などを大きく左右した。だが、もっと大きな変化は、ウイルスがもたらした混乱に便乗するアメリカの革命派によって、アメリカでは自国の歴史に対する国民の認識が一変したことだった。¹

しかしこの認識革命は、一朝一夕に成ったことではない。長年にわたり、アメリカの大学や学校で反米、親共「教育」が行われてきた結果として、アメリカの若者を含めて、多くのアメリカ人が洗脳された。² 共産主義者、社会主義者、それから中国共産党の工作員などの反社会分子が、少しずつアメリカ人の歴史認識を変えようとしてきた。³ 戦後西ドイツの共産主義活動家ルディ・ドゥチュケは、1967年に「制度内への長征」を口にしたが、それはイタリアの革命家アントニオ・グラムシが長い間夢見ていたことを実現することだった。グラムシは文化を戦場と見なし、彼の思想的弟子であったドゥチュケ同様、様々な制度を引き継ぐことにより、それを左翼マルクス主義者の道具にしようとしたのだ。2020年は、彼らの長年の夢である「制度内への長征」が、やっと目的地に辿り着いた年である。⁴ 共産主義者、社会主義者、革命的マルクス主義者の洗脳によってアメリカの歴史認識が変化し、左翼に期待されている社会の実現が近付いていると言えよう。

共産主義社会が最終目的だとしても、彼らにとって中間目的とはなんだろう。いうまでもないが、グラムシが想像していたのと同じ共産主義的・暴力的革命だ。革命は、歴史認識を変えれば実現できるという法則が今年実証された。⁵ 2020年に顕在化したのは、歴史認識の革命と実際に行われる政治革命との繋がりだ。捏造した「歴史」をアメリカ国民の頭に刷り込む目的は、結局、共産主義革命だ。共産主義革命を勃発させる一つの方法は、あらゆる歴史を捏造して、共産主義を美化する事だ。⁶ この悪循環は、2020年に生きている人間には誰でも見えているはずだ。⁷

2020年とその以前にアメリカ国内で誰が何を教え、本格革命の準備をしていたか、以下に具体的に紹介する。それからアメリカ国内で共産主義など左翼の洗脳、捏造、歴史認識革命に反論している学者も紹介する。結論を先に書けば、反論している誠実な学者はまだいるものの、アメリカのアカデミー、学校などはほとんど左翼に乗っ取られ、しかもその一部は中国共産党の支配下にあるので、アメリカの学界における反米、親共傾向と、アメリカ国民に対する歴史認識革命は、これから更に激化する可能性が高い。⁸

「1619年プロジェクト」とその背景

2020年にアメリカで起きた、歴史に関する一番有名な動きは、「1619年プロジェクト」だ。「1619年プロジェクト」とは、『ニューヨーク・タイムズ』のコラムニストであるニコール・ハンナ・ジョンズが2019年に、マッカーサー基金などの左翼サポートを受けて発表したアメリカ史の根本的書き直しへの挑戦である。⁹「1619年プロジェクト」は捏造に満ちていると、リンカーン政権と南北戦争を専門にするアレン・C・グエルゾーが指摘するが、2019年にハンナ・ジョンズは「1619年プロジェクト」でピューリッツァ賞を受賞するほど、影響力を発揮している。¹⁰「1619年プロジェクト」のせいで、アメリカ人の自国認識は2020年に一変した。

例えば2019年9月、「1619年プロジェクト」を巡る嵐が激しく吹き始めた頃、テキサス州のヒューストン市で開催された民主党大統領予備選の討論で、同じテキサス州出身の若手政治家 ベト・オロークは、演壇で次のようにはっきり表明した。「アメリカの歴史は、奴隷が初めてアメリカ大陸に連れてこられた1619年8月20日から始まった。だから、1776年7月4日に建国を祝っているのをやめて、1619年8月20日からアメリカが発祥していると考えるべきだ」。¹¹ 今までの大統領ディベートは愛国を論ずることが常識だったが、今回の大統領選挙で民主党は常識を逆さまにして、国を侮辱することを基準に設定した。ベト氏がディベート舞台で発表した発言は、ベト本人が古い資料を調べてわかった事実ではなく、「1619年プロジェクト」を鸚鵡返ししていただけだ。

「1619年プロジェクト」が訴える一つの大きな不満は、アメリカ史の教育の中に占めている白人の存在が大きすぎるということだ。アメリカの学校教育の一環として、アメリカの生徒はもちろんアメリカ史を勉強させられる。その歴史の出来事の流れ、歴史の大筋は確かに大体白人を中心にするものだ。例えば、1776年にトーマス・ジェファソンが独立宣言を書いて、アメリカという新しい国が正式に誕生したとか、1781年のヨークタウン戦後にイギリス将軍チャールズ・コーンウォリスが降伏して独立戦争が終わったとか、1789年にアメリカ合衆国憲法ができて、独立戦争で鍛えられたアメリカの愛国者が国の基盤をやっと固めて、アメリカの基本的権利が確保され、アメリカの方向性が設定されたなど、外国でも有名なアメリカ史の様々なエピソードが、白人の出来事をベースにして教えられる。

しかし「1619年プロジェクト」の批判は、「アメリカ史のカリキュラムは白人が多すぎる」という点だけに止まらない。「1619年プロジェクト」はアメリカ史の「理想」まで拒否する。今までのアメリカ史の教え方を改善するどころか、徹底に壊す事が本当の目的なのだ。

今までのアメリカ史の教え方は、アメリカの本当のことを紹介しながら、アメリカがそもそも持つ「理想」も紹介して、バランスよくアメリカ史を教える事だった。憲法制定の後、例えば南北戦争や黒人に対する迫害があったが、アメリカの理想は独立宣言と合衆国憲法に基づいていて、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の「夢」は、肌の色に関係なく、その理想を全国民に与えることだったという趣旨が、数十年前までアメリカ国内で歴史教育のスタンダードだった。筆者も、小学校、中学校、そして高校の時に、こういう歴史を教わった。中学校で、アメリカ合衆国憲法の前文を、歌の形で暗記させ

られた時のことは、未だにいきいきと覚えている。アメリカには罪もあると認めながら、希望の炎の方が強いので、アメリカ人である事を誇りに思いましょうというのが、アメリカ史の先生のスタンスだった。歴史の時間では、過去をそのまま教えられて、奴隷制度、ベトナム戦争の時にあったベトナム農民の虐殺などは一切隠されないで開示されていたが、どちらかという、アメリカという国は決して悪い国ではない、特に人種差別の面で大きく進歩してきた国だ、と学校の先生が教えていた。

「1619年プロジェクト」は、このアメリカ史の中に潜んでいると言われる希望を消す事によって、アメリカの現在を大きく変えるようにすることが最終的戦略だ。その戦略は、実は新しい戦略ではなく、昔からマルクス主義者が使っているお馴染みの戦略だ。

「1619年プロジェクト」の支流、文化マルクス主義

1960年代からアメリカ国内の主要大学には、共産主義者と文化マルクス主義者が次々に潜入して、アメリカの教育を全面的に変えようと画策していた。例えば文化をマルクス主義の戦場として見ているフランクフルト学派が特に有力だった。その中で、例えばドイツ人マルクス主義者ヘルベルト・マルクーゼ（1898年—1979年）とマックス・ホルクハイマー（1895年—1973年）、エーリヒ・フロム（1900年—1980年）などが有名だ。彼らを含めたフランクフルト学派が取り組んでいるプロジェクトは、西洋の「ブルジョア文化」が腐敗していてマルクス主義革命による「解放」を妨げているので、その「ブルジョア文化」を覆してマルクス主義革命の支度をするにある。¹²

フランクフルト学派のメンバーは共産主義者、マルクス主義者だったが、アメリカ合衆国は冷戦でソ連と対立していたので、冷戦中のアメリカ国内では、「私は共産主義者だ」と簡単に言えなくなっていた。¹³ 共産主義者を自称する学者は、大学から追い出される可能性も十分あった。なので、言い回し、隠語、美称など、直接に共産主義のプロパガンダだと言わないで、秘かに共産主義プロパガンダがばら撒かれていた。その影響で、時間が経てば経つほどアメリカ国内が少しずつ赤く染められていった。アメリカが赤く染められたのは、知らないうちにそうなったわけだ。

例えば、上述したマルクーゼが『純粋な寛容の批判』を出版した1969年後、「批判理論」が唱えられてきた。¹⁴ マルクーゼのテーゼは、人間の「解放」のために出来るだけ右翼を押し潰して、左翼だけに寛容であるべきだ、というものだ。¹⁵ 同じ1969年に、マルクーゼは「解放に関するエッセー」を書いて、革命の必要を主張した。アメリカの中で、黒人もその革命の最先端に立たなければならない、とも書いている。¹⁶

ここに見える、マルクス主義者が想像する革命と黒人の役割はとても重要だ。アメリカのロー・スクールにたむろするマルクス主義者は、アメリカの法律が根源的に人種差別主義だと思わせるために、マルクーゼが発明した「批判理論」を「批判的人種理論」に発展させて、学生などに支持されていた。1970年代からハーバード大学のデリック・ベル教授が批判人種説の展開のリードをとって、アメリカ法曹の中から黒人囚人を使って革命を起こそうとした。ベルはマルクス主義者だった。¹⁷

今よく耳にする「白人特権」というスローガンも、文化マルクス主義者が発明したものだ。ベルの弟子ノエル・イグナチエヴが1967年に「白い肌の特権」という概念を発明して、

人種問題を武器化してから、マルクーゼの「右翼を押し潰す事によって左翼を解放させる」アイデアに従って、ベルはアメリカの法曹界を直接に攻撃した。¹⁸ ちなみに、イグナチエヴは猛烈な共産主義者だった。¹⁹

保守系シンクタンクであるヘリテージ財団のシニア・フェロー、マイク・ゴンザレス氏は、2020年に繰り返された「1619年プロジェクトの暴動」などの責任の大半は、文化マルクス主義に魂を売っている大学教授に帰する、と主張している。とりわけ、デリック・ベルの役割が大きいとゴンザレス氏は言う。ゴンザレス氏はベル教授が1995年に発表したエッセーを抜粋して、「ある文化を革命化する作業は、その文化のラディカル的な批評から始まる」と書いて、ベルが主張している批判的人種理論と2020年の暴動との関係を強調する。批判的人種理論は文化マルクス主義者が最初に発明したとゴンザレスは書きながら、アメリカで本格的に提起されたのは1977年で、ウイスコンシン州立大学で行われた批判人種説のコンフェレンスだったと書く。1989年にもまたウイスコンシン州立大学で批判人種説のシンポジウムが開催され、ウイスコンシン州マディソン市にあるこの大学は、反米の拠点として極めて有名になった。²⁰

ジェンダー学も文化マルクス主義

ウイスコンシン大学が反米の拠点としてよく知られているのは、歴史学部止まらない。²¹ ウイスコンシン大学は、フェミニズム、ジェンダー学などでも非常に有名どころだ。年間の全米ランキングで、その分野におけるトップ・ファイブに入ることも多い。ジェンダー学のメッカは、ウイスコンシン州立大学だ。反米歴史観とフェミニズム、ジェンダーイデオロギーとの重なりを注視すると、自虐史観のルーツと文化マルクス主義の影響が見えて来る。

フェミズムは最初から、例えばアメリカの理想を実現するために、女性も投票権を持たなければならないという考え方が主流だったが、1960年代からフェミズムが共産主義に乗っ取られて、アメリカの理想のためではなく、女性を搾取しているアメリカという悪質な国を滅ぼすために、と方向転換した。²² マルクス主義のフェミニストは、「Smash the patriarchy!」(家長制度、男性社会を叩け!)とよく絶叫するが、その意味はマルクーゼの共産主義仲間、テオドル・アドルノから来る。アドルノは、アメリカの社会の中のファシズムへの傾向を批判していた。ブルジョワ社会、とりわけアメリカの社会は権威主義的社会で、男性は家族の独裁者になりがちだとアドルノは主張する。²³ フェミニストはアドルノのアメリカ社会の「権威主義」批判を更に展開して、アメリカが家長社会、男性社会だとまで批判を膨らませた。現在のアメリカの大学では、この主張に沿っていないジェンダー学者は非常に珍しくて、反男性と反米のスタンスがジェンダー学の基本になった。²⁴

左翼フェミニズムの本質と反米歴史観の関係をよく説明する本として、『ジェーンの話』がある。²⁵ 『ジェーンの話』は、1960年代半ばからシカゴで違法中絶を提供した取り組みについて書いた一冊だ。題名の「ジェーン」は、実は中絶を提供するグループのあだ名だった。『ジェーンの話』は、昔そのグループの一員だったローラ・カプランが書いた本で、自分の経験と他のメンバーの回想によって綴られた一冊として、当事者が中絶制度を暴く非常に重要な証言だ。²⁶

「ジェーン」という運動の始まりは、最初に「クレア」と名乗る女性が中絶のニーズがあることに気が付いてから、シカゴで貧乏な女性に中絶を出来るだけ低コストで提供しようとしたことだ。しかし、「クレア」と名乗る人物の本名はヘザー・ブースで、今は左翼フェミニストとして、アメリカ国内で非常に有力な存在だ。ブースは1967年に「民主的社会を求める学生」(SDS)という反米、親共のテロ組織のラディカルなリーダーと結婚したが、それ以前からもずっと左翼活動을続けて来た。²⁷ ブースは徐々に過激的な組織、ベトナム戦争に反対しているベ平連のようなグループなどと連携して、中絶は、女性だけの問題ではなく、他の左翼的思考、運動などと関係していると考えられるようになった。²⁸ つまり、ブースは中絶問題を反米運動と結び付けた人物の一人だ。

ブースと彼女に協力する女性は、中絶を使ってフェミニズムを極左的傾向に転換すべく、舵を切った。ブースと「ジェーン」は、女性が男性に迫害されているからこそ、男性との間で出来た赤ん坊を中絶で無きものにして、自分の人生を自分だけでコントロールすることが目的になった。その延長線上で、現在のフェミニズムは男性と平等な権利を求めるところか、男性の絶滅、男性は一切要らないなどと主張するフェミニストが多い。もっと大きな目で俯瞰すると、フェミニストの目から見ると、アメリカ史、それから世界史は、男性の女性に対する攻撃にすぎず、男性は女性に対して暴力を振り、強姦しかしてこなかった、となる。反米、反男性を同時に主張しているフェミニストが少なくない。²⁹

ジェンダー学と「インターセクショナルリティ」

男女対立と憎しみだけではマルクス主義革命にならないと気付いた左翼は、フェミニズムをさらに過激化して、フェミニズムからジェンダー学に切り替えた。ジェンダー学は、どちらかというところ、あらゆる人の人格レベルで混乱を攪拌するためにある、革命的「学問」だ。男性、女性はそもそも有産階級(つまり、アドルノらが反対していた「ブルジョア」)が勝手に作り出したカテゴリーに過ぎないと決めつけて、人間の「解放」を妨げているという基本スタンスが、ジェンダー学だ。「解放」を実現するために、男性は女性になれるし、女性も男性になれる、元々性別(つまり、男女)は存在せず、いくつかの性別、または性別を完全に否定する「性別」もある、などと主張する。

前世代のフェミニスト、例えばレズビアン・フェミニストは、女性の権利と女性の特別な経験、考え方などを大切にする。そして以前に教わった通り、男性は女性に暴力と強姦をもたらさざるを得ないものだから、男性を排除したいという考えだが、そのレズビアン・フェミニストは今、「ファシスト」と呼ばれて、ジェンダー学の過激派から威嚇を受けている。例えば2017年2月にヘリテージ財団が主催したシンポジウムでは、レズビアン・フェミニストがトランスジェンダー・イデオロギーを批判して、女性を保護しようと発表したら、左翼から容赦無く中傷を受けていた。³⁰ そのシンポジウムで発表したジュリア・ベックは、以前から有名なレズビアン活動家であり、メリーランド州ボルティモア市のLGBT委員会の委員として活躍していたが、自分はトランスジェンダーだと称する男性の強姦魔のことを「彼女」と呼ぶのを拒否して、敢えて「彼」と呼んだことで弾劾されて、委員会から追い出された。トランスジェンダーを自称した強姦魔は、男性の刑務所から女性の刑務所に移送され、女性の刑務所でも二人の女性囚人を強姦したのに、それを批

判したベックの方が糾弾された。³¹

ベックに対する暴言、威嚇などに見えるのは、文化マルクス主義者が現在唱えている「インターセクショナリティ」だ。「インターセクショナリティ」は、あらゆる迫害、搾取などが結局繋がっていて、白人男性による支配体制を全て破壊しなければ人間の「解放」が出来ない、というイデオロギーだ。³² ベックは、「男でも女になれる」というイデオロギーを拒否する事で、「インターセクショナリティ」をも拒否していると見做された。だからベックはひどい暴言、威嚇を受けていた。要するに、ジェンダー・イデオロギーに制限をかけようとするベックと他のレズビアン・フェミニストは、マルクス主義革命への妨害になっているとされ、左翼から脅しを受けている。これも文化マルクス主義の一部に過ぎない。³³

偽りの歴史家、ハワード・ジンの役割

ベックの例にも見える左翼の暴力、暴言は、一般市民に拒まれているようだが、高等教育を受けているアメリカのインテリ層の中、ベックを糾弾する事に賛成している人は多い。³⁴ 実は、アメリカでは教育を受けていれば受けているほど、文化マルクス主義の考え方に賛成する傾向がはっきり見える。³⁵

さて、アメリカ国内で反米テロ組織が一体なぜ支持されているのか、不思議に思っている方が多だろう。その謎解きにハワード・ジン（1922年—2010年）の書籍が役に立つ。とりわけジンの『民衆のアメリカ史』は、今の反米体制の基盤を築いた一冊だ。³⁶ ジンの基本的解釈は、アメリカ史に二つのグループがある、つまり迫害を行っているグループと迫害を受けているグループがある、というものだ。迫害を行っているグループは、言うまでもなく白人男性だ。そして迫害を受けているグループは、白人男性以外の全ての人々だ。ジンのこの被害妄想を正しいと祭り上げている自虐史観は、アメリカ合衆国は元々だめな国だ、と繰り返している。ジンの『アメリカ史』では、アメリカを定義するのは、アメリカン・インディアンの退治、奴隷制度、人種差別、女性への圧政、大手企業や資本家に支配されたアメリカなど、文化マルクス主義者もよく指摘していることだ。³⁷

しかしジンが書くいわゆる『アメリカ史』は、誤った情報、または捏造した情報がかなり混じっている。³⁸ 例えばヘーマーケット事件がある。ヘーマーケット事件は、左翼の聖域化された出来事だ。1886年5月に、シカゴ市内のヘーマーケット広場で労働問題について演説が行われている最中に、誰かが自家製爆弾を大勢の中に投げつけて、爆弾が炸裂し、暴動を未然に防ごうとしていたシカゴ市の警官一人が即死、その後も7人の警官が爆弾によって受けた怪我が元で死亡した。他にも死者がいて、怪我人も百数十人を超えている。

問題は、爆弾を投げたのは「誰か」だ。当時、爆弾魔として逮捕された容疑者らは、実は無罪で、警備員本人がわざと爆弾を投げたか、嫌がらせで警察が違う人をわざと逮捕したか、不満に思う人や陰謀説を呟いている人も多かった。左翼は、爆弾を投げた人が同じ左翼だったとは、一切認めたくない。ジンも、誰が爆弾を投げたか未だにわからない、と書いて、いずれの場合にもヘーマーケットはアメリカ政府がその悲劇を利用して、労働者に対する迫害を更に悪化させたと書く。³⁹

しかし実際に、誰が爆弾を投げたかは判っている。警察が二回も逮捕して、二回とも逃げられ、三回目に逮捕する前に外国に逃げたアナーキストのルードルフ・シュナウベルトだったことが判っている。その事実は当時でも知られていて、疑問の余地は殆どないと思われる。アメリカ国内でなぜ広く知られていないかというと、教育機関を握っている左翼が敢えて教えないからだ。シカゴ市には「ヘーマーケットの殉教者」、つまり爆弾で亡くなった労働者とアナーキストのための石碑と銅像があるが、左翼の神話にも拘らず、その「殉教者」は警官の手ではなく、そして知らない人の手ではなく、自分たちの仲間の手で亡くなったというのは、左翼にとっては不都合な事実だ。ジンはもちろんそれを書かないし、アメリカの大学の教授もそのことをほとんど教えない。⁴⁰

ハワード・ジンの歴史歪曲とアメリカの国内テロ組織

ヘーマーケットはなぜ2020年に再び有名になったかというと、ヘーマーケットで爆弾魔に殺された警官のためのもう一つの石碑、銅像があって、それを1969年と1970年の二回も爆破したテロ組織「ウエザー・アンダーグラウンド」が蘇って来たからだ。2020年暴動以前から話題になっていた「ブラック・ライブズ・マター」というテロ組織は、昔の「ウエザー・アンダーグラウンド」の一員から支援と訓練を受けていたことが明らかになった。「ブラック・ライブズ・マター」は、昔の「ウエザー・アンダーグラウンド」が目指していたマルクス主義革命を起こそうとしている。

ヘーマーケット事件と同様、ブラック・ライブズ・マターの本質は公然の秘密だ。2015年のインタビューでブラック・ライブズ・マターの創立者の一人、パトリース・カラーズが「私たちは訓練済みのマルクス主義者だ」と明言した。⁴¹ ブラック・ライブズ・マターがマルクス主義の訓練を受けていたのは、元「ウエザー・アンダーグラウンド」メンバー、エリック・マンからだ。⁴² マンは、1969年にハーバード大学でテロ活動をした事で逮捕され、警官に対する殺人未遂などの犯罪で18ヶ月の懲役を受けた極悪テロリストだ。⁴³ ハーバード大学生ではなかったマンだが、ハーバード大学でのテロで逮捕される前にも、全米の大学キャンパスをアメリカのマルクス主義革命の中心にしたいと言っている「民主的社会を求める学生」(SDS)の一員として、コロンビア大学などで大規模の暴動を企画し指導した。⁴⁴

マンは、他の「ウエザー・アンダーグラウンド」メンバーと同じく、毛沢東、フィデル・カストロ、チェ・ゲバラなどに憧れていて、アメリカでも暴力的な共産主義革命を起こしたいと夢見ていた。⁴⁵ その革命の引き金として、アメリカの黒人の怒りが必要だと考え、黒人はずっと搾取されて来ているから怒れ!と、わざと怒りを煽っていた。⁴⁶ マンが創設に協力したブラック・ライブズ・マターの歴史観は、アメリカ全国の学校などのカリキュラムに織り込まれている。その目的は、子供を「小さなマルクス主義者に変貌させる」ことだ。⁴⁷ 自虐史観とマルクス主義革命には、見事に一貫性が見える。

文化マルクス主義とアメリカの現在の自虐史観の実り

残念ながら、ジンが捏造した『アメリカ史』はアメリカの学界、そして教員養成学校な

どで定番になっている。⁴⁸ 白人男性は悪者扱いされて、過去の白人男性も現在の白人男性もテロリストのような存在とされている。⁴⁹ 特に保守系アメリカ人と愛国者は、白人男性による支配制度を助長させているので、追い出さなければならないと言われている。2020年の暴動の中、歴史人物の銅像などが引きずり倒されていることがよくニュースになったが、破壊されたのは、奴隷を持っていた白人男性、例えばトーマス・ジェファークソン、ジョージ・ワシントン、大統領であったアンドリュー・ジャクソン、南北戦争の時南部の将軍であったトーマス・ストーンウォール・ジャクソンの銅像がほとんどだった。

その上、奴隷制度に反対していた人物の銅像などが2020年に破壊されたことも、ジンの自虐史観と歴史捏造がどれだけ普及したかということを見せてくれる。例えば、南北戦争の時にほとんど黒人兵士から成っていた第54マサチューセッツ歩兵連隊の指導者であったロバート・ショー大佐、北部の大統領で「奴隷解放宣言」を出したアブラハム・リンカーン、人種差別とは全く関係のないウイスコンシン州首都マディソン市の議事堂の前を飾る「進歩の女神」、それからイエス・キリスト、マリア、カソリックの聖人たちの銅像が取り壊されていたことも、ジンの教えの結実と言えた。⁵⁰ 誰であろうが、過去の事実そのものが駄目だとか、歴史実体が敵だとアメリカの若者は考えているようだ。⁵¹

大学の教授、学校の先生などは、こういう暴動、略奪などを止めようとはしない。却って、唆している。2020年6月に、ニューヨーク・シティにあるジョン・ジェイ・カレッジの教員、エリン・トンプソン准教授は、暴動を起こした連中に自分のツイッターで銅像の倒し方を教えていて、「もっと早く倒し」て、と促していた。⁵² 同じ時にアラバマ州立大学バーミングハム校の教授サラー・パルサクは、古代エジプトを研究しているオベリスクの専門家と自称していて、「オベリスクの倒し方が知りたい人のため」と題名するツイートの連載をアップした。⁵³ また2020年6月にミネソタ州セント・パウル市にあるクリストファー・コロンバスの銅像を倒したマイケル・フォルシアがその罪で刑務所に行かないよう、メトロポリタン・ステート大学助教授ラジ・セツラジュが介入して法曹と交渉した。⁵⁴ 2020年の暴動、略奪は、メイド・イン・ユニバーシティだった。

今日のアメリカ学界は、ほとんど反米、親共または公然たる共産主義者に牛耳られている。⁵⁵ 共産主義、社会主義を奉じる過激な教授らは、もう既に自分が共産主義者であることを隠そうとはしていない。公の場で、保守系、警察、アメリカの政治家、アメリカの一般市民、資本主義制度、そしてアメリカ政府に対する暴力を呼び掛けている。⁵⁶ 自分のツイッターにアップしている投稿や、テレビやラジオの出演などで、明らかに暴力を褒めたたていて、革命を期待する教授がいる。⁵⁷ 例えば、マイケル・アイザックソンは、上述のジョン・ジェイ・カレッジで経済学を教えていた教授だが、彼は2017年8月23日に自分のツイッターを更新して、「将来死んでいく警官を教える事が私の特権だ」と綴った。⁵⁸ ジョン・ジェイ・カレッジの卒業者は、よく警察署に就職して、警官になることで有名なので、アイザックソン氏は、その卒業者、つまり自分の教え子の一部がある日、警察の仕事の中で殺されることを想像して、もしそうなったら嬉しいということを書いたわけだ。そのツイートが全国ニュースになり、アイザックソンはフォックス・ニュースの人気キャスター、タッカー・カールソンの番組に出演して、自分が書いたことのどこが悪いのか、と厚顔無恥に正当化した。⁵⁹

アイザックソン事件のおよそ8ヶ月前の2016年のクリスマス・イブに、ドレクセル大

学教授ジョージ・チッチャリエロが自分のツイッターで、「クリスマスに欲しいのはただ一つ、白人ジェノサイドだ」と書いて、それから翌日のクリスマスに「はっきり言うておくが、ハイチで行われた白人ジェノサイドはとてもいいことだった」と書いた。⁶⁰ 白人に対する暴力を呼び掛けるアメリカ教授は、意外と偏在しているようだ。例えばウイスコンシン州立大学ジェンダー学研究者サミー・シャーク教授が2020年10月の副大統領ディベートの時に、ペンス副大統領に対する暴力などを呼びかけるツイートで全国ニュースの注目を集めた。⁶¹ 皮肉にも、シャーク教授は、ウイスコンシン州立大学で「反レーシズム」科目を担当している。

そしてアイザックソンが望んでいる警官に対する暴力は、他の教授も望んでいるようだ。例えばカリフォルニア州立大学デービス校の英語学部教授ジョシュア・クローバーは、2019年2月に「警官を殺すべきだ」と自己ツイッターに書いた。⁶² テネシー州ナシュビル市にあるヴァンダービルト大学准教授リサー・ゲンサーは、「反警官科目」を提供していることで2015年に話題になった。⁶³

「1619年プロジェクト」に反論するアメリカの歴史家、他の学者

上述した反米教授らと同じく「1619年プロジェクト」も、アメリカは人種差別の国で、歴史の草創期から人種差別をしてきたと一色に塗り潰そうとするが、反論する人もいる。例えば、なぜ1620年がアメリカの建国記念日に選ばれたかという点、その年に「メイフラワー号」でアメリカ大陸に到着したピルグリム・ファザーズは、それ以前から来ていたイギリス人とは違って、現地人を見下さないで、人種差別はしないグループだったからということ強調するジャーナリストもいる。1620年にプリマスに一步を踏んだピルグリムスは、例えばインディアンを馬鹿にしつつもアメリカに詳しくジョーン・スミスと仲が悪く、彼がインディアンを軽視していることが嫌いだった。アメリカ史には色々な人物が登場するが、その後に来たアメリカ人がヒーローとして憧れる人物は、やはり人種差別をやめて博愛を目指す人が圧倒的に多い。⁶⁴

アメリカは「人種差別」だけで片付けられないと反論している人は、他にもいる。例えば、「1619年プロジェクト」がもたらす暴力、反米ムードを憂う黒人運動家ロバート・ウッドソンは、「1776年で一致を」というプロジェクトを2020年に立ち上げた。⁶⁵ このプロジェクトの目的は、もっと的確に且つ長い目で見たアメリカの歴史教育を学校などに提供することだと言っている。ウッドソン氏と他の保守系黒人は、「1619年プロジェクト」を全面的に拒否する。「1776年で一致を」プロジェクトは、アメリカ史のカリキュラムを作成して、それを各学校で使ってもらよう運動を続けている。⁶⁶ なぜなら、「1619年プロジェクト」は黒人をあまりに見下しているからだ。黒人や他の有色人はアメリカ歴史の被害者であるというだけで、アメリカという国を転覆させない限り被害者の役割は終わらない。アメリカの歴史の大筋、本質は奴隷制度で人種差別だ、と「1619年プロジェクト」を主催した『ニューヨーク・タイムズ』は強く主張している。しかしその主張は、黒人に対する侮辱で、黒人が達成した成功を否定するものだ、とウッドソン氏は反論する。⁶⁷

他にも、「1619年プロジェクト」に反論している黒人学者がいる。例えば、ヴァンダービルト大学を退任したカロール・スエイン教授がいる。スエイン教授は、自分は黒人だか

ら被害者だと思ったことはない、常に成功を追いかけた結果、成功できたと言っている。⁶⁸ スタンフォード大学にあるフーバー研究所のトーマス・ソーエル教授、⁶⁹ 同じフーバー研究所のシェルビー・スティール氏、⁷⁰ 最高裁判所の判事クレレンス・トーマス氏、⁷¹ それから2020年12月に亡くなった経済学者ウォルター・ウィリアムズ教授も同様に「1619年プロジェクト」に反論している。⁷²

黒人だけではなく、「1619年プロジェクト」の主催者が全国に押し付けようとしている反米洗脳に反対している研究者は、確かに増えている。例えば2019年に出版されたオクラホマ大学教授ウルフレッド・マクレイ氏の『希望の国、アメリカ』が有名だ。⁷³ 『希望の国、アメリカ』は、題名でわかる通り、アメリカという国は単なる人種差別主義の悪質な国ではなく、たくさんの方が更なるいい人生を求めて来ている国で、黒人にとっても夢の国でもある、と書いている。マクレイ教授は、反米政治家にも公の場で反論している。例えばニュー・ヨーク出身の民主党議員アレクサンドリア・オカシオ・コルテスが、2019年に、サンクスギビングというアメリカの感謝祭は人種差別だと発表したら、マクレイは『ウォール・ストリート・ジャーナル』で彼女の論調を徹底的に論破した。⁷⁴

あと左翼の反米論調に反論している歴史学者として、キングズ・カレッジ研究者アミティー・シュレーズがいる。シュレーズ氏は、あまり知られていない米大統領の一人カルビン・クーリッジについての伝記を執筆したことで評判が高くなったが、2019年に出版した『グレート・ソサエティー』という歴史の本は、「黒人は奴隷制度の単なる被害者だ」という左翼の主張に反論する。⁷⁵ デーヴィッド・ホロウィツ氏も、大学の「過激派」教授の危険を暴露する本を出している。ホロウィツは昔、マルク主義者で日本の『赤旗』に当たる雑誌『ランパーツ』を編集していたので、マルクス主義者と彼らの行動を詳細に知っている。⁷⁶ ホロウィツは特に「ウエザー・アンダーグラウンド」のテロ活動を厳しく批判する。⁷⁷

学校の教育の腐敗と政治的偏見を指摘している学者もいる。メリー・ライス・ハッソンとテレサ・ファーマンの共著『今すぐ学校へ通わせるのをやめて』は、教員養成学校では反米洗脳とジェンダー・イデオロギー以外にほとんど何も教えられていないので、子供を絶対に教員養成学校へ行かせてはならない、と警鐘を鳴らしている。⁷⁸ この数年話題になっている、共産主義イデオロギーを子供に押し付けているのではないかと懐疑的に見られている「コモン・コア」カリキュラムを批判する学者、記者などもある。⁷⁹ プリンストン大学教授ロバート・P・ジョージの『良心とその敵』は、教育制度も含めてアメリカの左翼が教育制度などを攻撃し、破壊活動の標的としていることの危険性について述べている。⁸⁰

保守系シンクタンクのマンハッタン・インスティテュートのフェロー、ヘザー・マック・ドナルドは、「ダイバーシティ訓練」など他の極左洗脳によって大学を始めアメリカ社会全てがどれだけダメージを受けているか、『ザ・ダイバーシティ・デルージョン』で厳しく指摘していて、左翼が施すいわゆる「教育」を非難している。⁸¹ 「ナショナル・アソシエーション・オブ・スコラーズ」のプレジデントで、元ボストン大学の人類学教授ピーター・ウッドも、2003年に「ダイバーシティ」を批判的に扱う本を出版した。⁸²

「全国学識者協会」(NAS)の斡旋で、ウッドは「1619年プロジェクト」の主張に反論するために「1620年プロジェクト」を立ち上げて、志のある学者を集めてシンポジウムなどを開催している。⁸³ ウッド教授は2020年に、「1619年プロジェクト」に反論する

『1620年』を出版した。⁸⁴『ニュー・クライテリオン』という高度な美術、詩、文学、政治などを分析する雑誌を編集している学者ロジャー・キンバル氏も、以前からアメリカの大学、とりわけ歴史学部が偏見、暴力を促している事を強く指摘し、批判している。⁸⁵ コーネル・ロー・スクールのウィリアム・ジェーコブセン教授は、ブラック・ライブス・マターがマルクス主義者の傀儡と化しているテロ組織だと、2014年から繰り返して発言し、また執筆している。⁸⁶ アメリカ国内で「1619年プロジェクト」が描く歴史像に反対している学者、有識者などは、確かに存在する。

「1619年プロジェクト」を止められる勢いはあるか

以上のように、良心のある学者は確かにいるけれども、全体的にアメリカの学界がまともな状態に戻る可能性は極めて低い、と認めざるを得ない。例えばジェーコブセン教授は、今年またブラック・ライブス・マターを批判したことで、コーネル大学の後援者、学生、そして他の教員などから糾弾を受け、解雇を要求されている。⁸⁷「アメリカ史」の主流、つまり「1619年プロジェクト」の主張に反対する他の教授、学者も同様だ。反米的なアメリカの学界を変えるためには、歴史認識の革命がなければ出来ない見通しだ。

確かに上述したピーター・ウッド教授や「ナショナル・アソシエーション・オブ・スコラーズ」の努力で、例えばワシントン州の一番大きな学区の15区が「1619年プロジェクトカリキュラム」の使用を拒否し、他にも反米カリキュラムをブロックした例がある。⁸⁸ しかし、全国では「1619年プロジェクト」の進捗度に拘らず、そのイデオロギーが深く染み込んでいる。2020年7月現在、「1619年プロジェクト」カリキュラムを採用している学校は、全米の4500校を超えていた。⁸⁹ 教育者は、大体「1619年プロジェクト」の主張に賛成しているようだ。⁹⁰

例えば、2020年にアナキストが市内の一部を奪って「自治区」(オートノマス・ゾーン)を設立したことで注目を浴びたワシントン州シアトル市の学校のある教師は、その「自治区」を一掃することを望んでいると発表した会社と個人のリストを自分のツイッターにアップして、暴力を呼び掛けた。その教師は、女でも男でもないと言っていて、暴動などで暴力を振るうことで何回も逮捕された経歴があることが、後で判明した。何の教師かという、「歴史の先生」だと本人は認めている。⁹¹ 2020年8月にワシントン州の隣オレゴン州ポートランドの暴動で、アリス・エリザベス・ジョンソンが逮捕された。ジャーナリストのアンディー・ニョーによれば、ジョンソンは暴徒を上空から監視していたヘリコプターの操縦士をレーザーで狙い撃ちにし、失明させてヘリコプターを墜落させようとしたほか、自らも暴徒に加わり、大きな石を投げて警官数人を負傷させた。⁹² ジョンソンは、仕事として生徒に教えたりしているという。2017年9月に暴動で逮捕された中学教師イヴォンヌ・フェラーカーも、暴力を振るったかどで逮捕された。⁹³ 彼女は後にテレビに出演して、暴力の必要を改めて主張した。アメリカの各保守系メディアは、アンティファ(Antifa、アンチ・ファシストの略称)と学校の先生、先生の労働組合との深い関係を暴露している。⁹⁴ アイオワ州のカークウッド短期大学の教員ジェフ・クリンズマンも、自分のツイッターに「私はアンティファだ」と綴って、トランプ大統領に対するテロ組織の暴力的威嚇に賛成していると書いた。⁹⁵ そして上述したエリック・マン以外にも「ウェザー・

アンダーグラウンド」のメンバーは、アメリカ学界で暖かく歓迎されており、未だに「先生」として活躍している。元テロリスト、ビル・エアーズはイリノイ州立大学の教授で、彼のパートナーで、過去にウェザー・アンダーグラウンドの爆弾魔として逮捕されたベルナディン・ドーンは、ノースウエスタン大学ロー・スクール教授だった。⁹⁶

アメリカの学界では、「1619年プロジェクト」は大きなイデオロギーの一部に過ぎない。文化マルクス主義、共産主義、過激的反米革命主義などは、融合した形として「ウオーク」（目が覚めた）イデオロギーになった。⁹⁷ 中国共産党もアメリカ国内の歴史観をめぐる混乱を煽り、ウオーク・イデオロギーを助長している。⁹⁸ 結果として、アメリカではアメリカ史が教えられても、アメリカ人はアメリカ史についてほぼ無知だ、と言わざるを得ないのである。⁹⁹

注

- 1 Keeanga-Yamahatta Taylor, “How Do We Change America?” The New Yorker, June 8, 2020
- 2 Dr. Susan Berry, “National Parents Coalition: Revisionist History in Public Schools Has Led to Socialist Uprising in U.S.,” Breitbart, November 14, 2020
- 3 Lydia Saad, “Socialism as Popular as Capitalism among Young Adults in U.S.,” Gallup, November 25, 2019
- 4 Bradley Thomas, “The Left’s Long March through the Institutions Is Now Pretty Much Complete, and It’s a Disaster,” Center for Individualism, May 19, 2019, Jorge González-Gallarza Hernández, “The Intellectual Roots of Today’s Identity Politics,” National Review, June 20, 2020, Roger Kiska, “Antonio Gramsci’s Long March through History,” Religion and Liberty, vol. 29, no. 3 (December 12, 2019)
- 5 Vasko Kohlmayer, “This is a Marxist Revolution,” LewRockwell.com, October 31, 2020, Alan Woods, “World Revolution,” Marxist.com, November 1, 2019. See also “Ideology,” in Michele Filippini, tr. Patrick J. Barr, Using Gramsci: A New Approach (London, England: Pluto Press, 2017), pp. 4-23.
- 6 See Louis Althusser, interviewed by Maria Antonietta Macciocchi, transcribed by Andy Blunden, “Philosophy as a Revolutionary Weapon,” New Left Review, 1971 (originally in Italian in L’Unità, 1968), archived at <https://www.marxists.org/reference/archive/althusser/1968/philosophy-as-weapon.htm>
See also the Marxist view of history, e.g., Adam Booth, “The Individual and the Marxist View of History,” Marxist.com, May 28, 2019.
- 7 Scott McKay, “Four Stages of Marxist Takeover: The Accuracy of Yuri Bezmenov,” The American Spectator, July 10, 2020
- 8 Kyle Smith, “The Other Chinese Infection,” National Review, April 5, 2020, Jimmy Quinn, “American University Administrators Must Step Up to Fight Beijing’s Authoritarian Influence,” National Review, August 23, 2020, Helen Raleigh, “American Universities Are Now the Front Line of the China-U.S. Cold War,” The Federalist, August 25, 2020, Jack Beyrer, “Chinese Data Leak Shows Thousands of CCP Members Employed by U.S. and European Companies,” The Washington Free Beacon, December 14, 2020, Selwyn Duke, “Video Shows Chinese Professor Talking about American ‘Elite’ Traitors Who Work for Beijing,” The New American, December 8, 2020
- 9 John McWhorter, “The 1619 Project Depicts an American Tainted by Original Sin,” Reason, January 30, 2020, Phillip W. Magness, “The 1619 Project Debate: A Bibliography,” American Institute for Economic Research, January 3, 2020

- 10 Allen C. Guelzo, "Pulitzer Overlooks Egregious Errors to Award Prize to New York Times' Fatally Flawed '1619 Project'," *The Daily Signal*, May 5, 2020, Adam Serwer, "The Fight Over the 1619 Project Is not about the Facts," *The Atlantic*, December 24, 2019, Phillip W. Magness, "The Case for Retracting Matthew Desmond's 1619 Project Essay," *American Institute for Economic Research*, February 11, 2020
- 11 Krystina Skurk, "Why Beto O'Rourke's Embrace of the 1619 Project Is Dangerous," *The Federalist*, September 16, 2019, Brad Polumbo, "Beto O'Rourke Should Face Reality and Drop Out," *The Washington Examiner*, September 12, 2019
- 12 Kieran Durkin, "Erich Fromm and the Revolution of Hope," *Jacobin*, August 18, 2020, Pedro Blas Gonzalez, "Cultural Marxism, Antonio Gramsci, and the Frankfurt School," *Voegelin View*, March 31, 2018
- 13 Judy Daubenmier, "Professors Recall Hard Lessons of McCarthyism: Free speech: Some want the University of Michigan to apologize to three professors who were branded as potential subversives because of their former Communist sympathies," *Los Angeles Times*, February 25, 1990
- 14 Mike Gonzalez, "The New York Times' 1619 Project Reeks of Herbert Marcuse's Divisive Ideology," *The Federalist*, October 3, 2019
- 15 See "Repressive Tolerance," in Robert Paul Wolff, Barrington Moore, Jr., and Herbert Marcuse, *A Critique of Pure Tolerance* (Boston: Beacon Press, 1969), pp. 95-137, and Allen Mendenhall, "Cultural Marxism Is Real," *The James G. Martin Center for Academic Renewal*, January 4, 2019.
- 16 Herbert Marcuse, *An Essay on Liberation* (Boston, MA: Beacon Press, 1969)
- 17 Ben Shapiro, "Critical Race Theory Explained," *Breitbart*, March 11, 2012
- 18 Matt Schudel, "Noel Ignatiev, Scholar Who Aimed to Abolish White Racial Privilege, Dies at 78," *The Washington Post*, November 13, 2019
- 19 Jay Caspian Kang, "Noel Ignatiev's Long Fight against Whiteness," *The New Yorker*, November 15, 2019, Michael Staudenmaier, "Noel Ignatiev, 1940-2019: A Revolutionary Who Tried to Think," *The Abusable Past*, November 19, 2019
- 20 Mike Gonzalez, "2020 Proves What Happens on Campus Does not Stay on Campus," *The Daily Signal*, December 18, 2020
- 21 See Arlen Williams, "Truthing Up, In the Face of Marxist Spawned Power in Wisconsin," *RenewAmerica*, February 18, 2011.
- 22 See Oz Frankel, "Whatever Happened to 'Red Emma'? Emma Goldman, from Alien Rebel to American Icon," *The Journal of American History*, vol. 83, no. 3 (December, 1996), pp. 903-942, and Anne Enke, "Smuggling Sex through the Gates: Race, Sexuality, and the Politics of Space in Second Wave Feminism," *American Quarterly*, vol. 55, no. 4 (December, 2003), pp. 635-667. See also Derrick Bell et al., "The Crisis of African American Gender Relations," *Transition*, no. 66 (1995), pp. 91-175.
- 23 Edward N. Zalta ed., Lambert Zuidervart, "Theodor W. Adorno," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2015 Edition), <https://plato.stanford.edu/archives/win2015/entries/adorno/>
- 24 See T.R. Young, "Marxism and Social Movements: Theory and Practice for Social Justice," *Contemporary Sociology*, vol. 28, no. 3 (May, 1999), pp. 268-270
- 25 Laura Kaplan, *The Story of Jane: The Legendary Underground Feminist Abortion Service* (Chicago, IL: The University of Chicago Press, 2019) (reprint: first published 1995)
- 26 Clyde Haberman, "Code Name Jane: The Women Behind a Covert Abortion Network," *New York Times*, October 14, 2018
- 27 Sarah Wasik, "Fighting for a Better World: Heather Booth on the Power of Organization and Activism," *The Gate*, February 7, 2018
- 28 Claire Lampen, "The Underground Network that Helped Women Get Abortions When No One Else Would," *Vice*, January 30, 2018
- 29 Clara Bingham, "Code Names and Secret Lives: How a Radical Underground Network Helped Women Get Abortions Before They Were Legal," *Vanity Fair*, April 17, 2019

- 30 Spencer McCloy, "Why the LGBT Alliance Could Be on the Brink of Schism," The Heritage Foundation, July 27, 2018, Ryan T. Anderson, "The Left Is Shunning Liberals with Concerns about Transgender Agenda," The Heritage Foundation, January 29, 2019
- 31 Madeleine Kearns, "Feminist Testifies against the 'Equality Act,'" National Review, April 2, 2019
- 32 See Ruth Milkman, "A New Political Generation: Millennials and the Post-2008 Wave of Protest," *American Sociological Review*, vol. 82, no. 1 (February, 2017), pp. 1-31.
- 33 See Jeff Manza and Michael A. McCarthy, "The Neo-Marxist Legacy in American Sociology," *Annual Review of Sociology*, vol. 37 (2011), pp. 155-183, Jan Willem Duyvendak, "Cultural Marxism and Intersectionality," *Sexualities*, vol. 21, issue 8 (December, 2018), pp. 1300-1303, and Susan Ferguson, "Intersectionality and Social-Reproduction Feminisms: Toward an Integrative Ontology," *Historical Materialism*, vol. 24, issue 2 (June, 2016), pp. 38-60.
- 34 See, e.g., Margaret Viggiani, "Right-Wing Feminists and their Anti-Trans Agenda," Freedom Socialist Party, April, 2020.
- 35 See Robert Stacy McCain, "The Rocky Horror Ideology Show," *The American Spectator*, January 29, 2019, and Bradford Richardson, "Liberal Professors Outnumber Conservatives Nearly 12 to 1, Study Finds," *Washington Times*, October 6, 2016.
- 36 ハワード・ジン、猿谷要和訳『民衆のアメリカ史』（上巻、下巻）（2005、世界歴史叢書），see also Howard Zinn, *A People's History of the United States, 1492-Present* (Revised and Updated Edition) (New York, NY: HarperPerennial, 1980, 1995)
- 37 See, e.g., Zinn, *People's History*, op. cit., Ch. 11, "Robber Barons and Rebels," pp. 247-289.
- 38 Paul Kengor, "Debunking Howard Zinn's Amerikkka," *The American Spectator*, September 11, 2019, <https://www.zinnedproject.org>
- 39 Howard Zinn, *People's History*, op. cit., p. 266
- 40 Jason Morgan, "Debs is Different: *Rerum Novarum* and U.S. Labor History," *Modern Age* (January, 2015), pp. 27-36
- 41 Valerie Richardson, "'We Are Trained Marxists': Black Lives Matter Co-Founder Featured in GOP Ad," *The Washington Times*, June 25, 2020, Samantha Mandeles, "'Trained Marxist' and BLM Co-Founder Patrisse Cullors Signs Warner Bros. TV Deal," *Legal Insurrection*, October 25, 2020
- 42 Joshua Klein, "Black Lives Matter Founder Mentored by Ex-Domestic Terrorist Who Worked with Bill Ayers," *Breitbart*, June 24, 2020
- 43 Lee Stranahan, "Black Lives Matter's White Grandfather: Truth about Criminal Justice Reform, Part 3," *Breitbart*, May 27, 2016
- 44 Paul Saba, "SDS and Weathermen Hold Separate Protests," *Harvard Crimson*, November 26, 1969, <http://scua.library.umass.edu/umarmot/mann-eric/>
- 45 See Eric Mann, "Lost Radicals: Blacks In and Out of the Left," *Boston Review*, January 15, 2014, Mike Gonzalez, "To Destroy America," *City Journal*, September 1, 2020, and William F. Jasper, "Son on 'Weather Underground' Terrorists Running for San Francisco DA. Is Soros Funding Him?" *The New American*, March 9, 2019.
- 46 David Lewis Schaefer, "Marx, Machiavelli, and Black Lives Matter," *Law and Liberty*, December 14, 2020
- 47 Sloan Rachmuth and Katie Jensen, "Black Lives Matter in Public Schools Is Turning Kids into Little Marxists," *Breitbart*, July 8, 2020
- 48 Robert Knight, "Socialism, Howard Zinn, and His Fake History," *The Washington Times*, January 25, 2020, Evita Duffy, "High School History Teacher Throws Out Textbooks for Radical Marxist 'History' Book," *The Federalist*, June 19, 2020, Fred Siegel, "The Chicago Seven and the Long Sixties," *First Things*, December 17, 2020
- 49 "'Let White People Die' Prof Triples Down: Whiteness Is 'Mental and Physical Terrorism,'" *The College Fix*, March 7, 2020
- 50 Erin Coates, "Rioters Deface Monument to Black Civil War Veterans Who Served in the Union," *The Western Journal*, June 5, 2020, Maggie Quinlan, "Spokane's Lincoln Statue Vandalism Is Getting International Attention after Similar Incidents on Thanksgiving," *The Spokesman-*

- Review, Nov. 29, 2020, "California Parish Prays for Vandal after Mary Statue Beheaded," Catholic News Agency, Aug. 20, 2020, Carina Benton, "After Bishop Knelt to Black Lives Matter, a Vandal Decapitated a Statue of Jesus in His Church," The Federalist, September 23, 2020
- 51 Mike Gonzalez and Andrew Olivastro, "The Agenda of Black Lives Matter Is Far Different from the Slogan," The Heritage Foundation, July 3, 2020
 - 52 Jonah Engel Bromwich, "What Does It Mean to Tear Down a Statue?" New York Times, June 11, 2020
 - 53 Susan Edelman, "NYC College Professor Tells Protestors How to Topple Statues 'Faster'," New York Post, June 27, 2020, Alex Swoyer and Valerie Richardson, "Univ. of Alabama Birmingham Professor Instructs Rioters on How to Tear Down Monuments," The Washington Times, June 1, 2020
 - 54 Marlo Safi, "Man Who Toppled Christopher Columbus Statue Avoids Jail Time Due to 'Restorative Justice' Program," The Daily Caller, December 7, 2020
 - 55 "Sen. Cruz, Rep. Rooney Reinroduce Bill to Counter Chinese Espionage Efforts in American Universities," U.S. Senator for Texas Ted Cruz, Jun. 4, 2019 https://www.cruz.senate.gov/?p=press_release&id=4517, "Congressman Barr Combats Chinese Espionage Operations in America's Higher Education Research," U.S. Congressman Andy Barr, September 9, 2020 <https://barr.house.gov/press-releases?ID=36ABF785-A128-454D-8664-955C15948A5D>, Steve Postal, "How China Has Infiltrated the U.S., and How We Should Fight Back," The American Spectator, December 16, 2020
 - 56 Alana Mastrangelo, "Rap Sheet: 117 Acts of Violence and Harassment against Conservatives on Campus," Breitbart, November 28, 2019
 - 57 Sarah Taylor, "Leftist Professor Incites Extreme Violence, You Need to See This...", Freeman News, October 1, 2020
 - 58 "Professor, Antifa Activist Who Said 'It's a Privilege to Teach Future Dead Cops' Gets Fired," Law Enforcement Today, October 13, 2019
 - 59 "'Threats to Faculty' a Bad Reason to Suspend Prof," National Association of Scholars, October 2, 2017
 - 60 Scott Jaschik, "Drexel Condemns Professor's Tweet," Inside Higher Ed, December 26, 2016
 - 61 Haley Worth, "'Racist', 'Demon', 'Scumbag', 'White Boy': Profs Take Aim at Pence during VP Debate," Campus Reform, October 8, 2020
 - 62 Sawsan Morrar, "UC Davis Professor Reportedly Said Cops 'Need to Be Killed'. Officials Condemn His Comments," The Sacramento Bee, February 26, 2019
 - 63 "Vanderbilt Professor to Teach Anti-Police Course," LEO Affairs, January 14, 2015
 - 64 Rebecca Mansour, "Why We Chose 1620 as the Year of 'Our True Founding', Not 1619," Breitbart, November 26, 2020
 - 65 Penny Starr, "Black Leaders Launch '1776 Unites' U.S. History Curriculum, Education Secretary Applauds," Breitbart, September 17, 2020
 - 66 Randy DeSoto, "New Pro-America School Curriculum, 1776 Unites, Released in Response to 1619 Project's 'Diabolical' Message," The Western Journal, September 17, 2020
 - 67 Tim Hains, "Bob Woodson: 1619 Project Sees Blacks as 'Victims'," Real Clear Politics, March 16, 2020
 - 68 Charlotte Hays, "1776 Project vs. 1619 Project: Black Historians Correct New York Times," Independent Women's Forum, February 19, 2020, Carol Swain, "Commentary: A Dangerous Revisionist History of America's Founding Pushes a False and Destructive Narrative," The Tennessee Star, February 20, 2020
 - 69 Elise Ehrhard, "Legendary Thomas Sowell Warns Our Country Is Approaching the 'Point of No Return'," The Western Journal, July 18, 2020
 - 70 Randy DeSoto, "Shelby Steele: Left Experts at Manipulating 'White Guilt' to Grab Power over Americans," The Western Journal, June 12, 2020
 - 71 Myron Magnet, Clarence Thomas and the Lost Constitution (New York, NY: Encounter Books,

- 2019)
- 72 Walter E. Williams, "New York Times' '1619 Project' Has Key Error about Our Founding," *The Daily Signal*, August 28, 2019
 - 73 Wilfred M. McClay, *Land of Hope: An Invitation to the Great American Story* (New York, NY: Encounter Books, 2019)
 - 74 Wilfred M. McClay, "The Weaponization of History," *Wall Street Journal*, August 25, 2019
 - 75 Amity Shlaes, *Great Society: A New History* (New York, NY: HarperCollins, 2019)
 - 76 David Horowitz, *Radicals: Portraits of a Destructive Passion* (Washington, DC: Regnery, 2012)
 - 77 David Horowitz, *Radicals*, op. cit., pp. 127-131
 - 78 Mary Rice Hasson and Theresa Farman, *Get Out Now: Why You Should Pull Your Child from Public School before It's Too Late* (Washington, DC: Regnery Gateway, 2018)
 - 79 Alex Newman, "Scandal Engulfs Common Core Architect for Rewrite of U.S. History," *The New American*, August 25, 2014
 - 80 Robert P. George, *Conscience and its Enemies: Confronting the Dogmas of Liberal Secularism* (Wilmington, DE: ISI Books, 2013)
 - 81 Heather Mac Donald, *The Diversity Delusion: How Race and Gender Pandering Corrupt the University and Undermine Our Culture* (New York, NY: St. Martin's Press, 2018)
 - 82 Peter Wood, *Diversity: The Invention of a Concept* (San Francisco, CA: Encounter Books, 2003)
 - 83 <https://www.nas.org/topics/1620-project>
 - 84 Stanley Kurtz, "A Book for Our Times: Peter Wood's 1620 Skewers 1619 Project," *National Review*, November 16, 2020
 - 85 Roger Kimball, *Tenured Radicals: How Politics Has Corrupted Our Higher Education* (Chicago, IL: Ivan R. Dee, 1990)
 - 86 Virginia Allen, "Law Professor Speaks Out after Being Shamed for Writing Honest History of BLM," *The Daily Signal*, December 22, 2020
 - 87 Jonah Gottschalk, "Cornell Professor and 'Legal Insurrection' Founder Targeted for Criticizing BLM," *The Federalist*, June 11, 2020
 - 88 <https://www.nas.org/blogs/article/washington-schools-reject-the-1619-project>
 - 89 Hannah Farrow, "The 1619 Project Curriculum Taught in Over 4,500 Schools—Frederick County Public Schools Has the Option," *Medill News Service*, July 21, 2020
 - 90 Felicity Barringer, "Education: The Mainstreaming of Marxism in U.S. Colleges," *New York Times*, October 25, 1989
 - 91 Louis Casiano, "Seattle Antifa Member Who Touted Business Owners Hit List Works as Children's Camp Counselor," *FoxNews*, December 22, 2020
 - 92 David Kamioner, "Meet Alice Phallus, The Face of Antifa: Life Skills Coach by Day, Anarchist by Night," *Lifezette*, August 26, 2020
 - 93 Mike LaChance, "Antifa Leader Who's Also Middle School Teacher Arrested in Berkeley," *Legal Insurrection*, September 27, 2017
 - 94 John Mills, "The Disturbing Intersection between Antifa, BLM, and Public-School Teachers," *The Epoch Times*, September 28, 2020
 - 95 Jessica Chasmar, "Iowa professor resigns after declaring 'I am antifa'," *The Washington Times*, August 26, 2019
 - 96 Matt Kaufman, "The University of Illinois' Other On-Staff Terrorist," *The Federalist*, June 24, 2014, Patricia Lear, "Rebel Without a Pause," *Chicago*, May 1, 1993
 - 97 Jarrett Stepman, "How 'Wokeness' Is a Product of Marxism," *The Daily Signal*, August 2, 2020, Rod Dreher, "'Antiracism' at LSU," *The American Conservative*, December 21, 2020
 - 98 C. Mitchell Shaw, "Chinese Communist Party Influence on U.S. College Campuses," *The New American*, March 9, 2018
 - 99 Amanda Woods, "Americans Don't Know Much about Nation's History: Survey," *New York Post*, February 15, 2019, Jarrett Stepman, "Americans Are Woefully Uneducated about Basic History," *Foundation for Economic Education*, October 14, 2018